

旅行者が交差する場としてのゲストハウス*

——交流型ツーリズムの社会心理学的研究——

林 幸 史**
藤 原 武 弘***

“You’ll find good, cheap guesthouses in many of Japan’s cities.” (Rowthorn et al., 2013, p.61).

I. ゲストハウスとは

交流としての観光

旅の醍醐味は見知らぬ人との出会いにある。旅をこのように表現すると異論を唱える人がいるかもしれない。しかし、旅先での良き出会いがその旅全体の印象を高めたり、その旅を忘れたいものにすることは誰もが納得できるだろう。佐々木(2000)は旅行者の経験内容の1つとして「関係強化(形成)」を指摘している。林・藤原(2008, 2012)の観光動機の研究においても、出会いや交流を求める動機である「現地交流」という次元が見出されている。これらのことから旅先での地域住民との交流や旅行者同士での交流は観光旅行の主要な経験内容の一つだといえるだろう。しかし、従来の観光心理学では、他の旅行者や地域住民と交流することが旅行者個人にどのような影響をもたらすのかといった旅の交流機能については目が向けられてこなかった。乾(2008)も、従来の観光研究は「場所」や「モノ」を対象とした“消費型の観光”を取り上げた研究が主流となっており、人間の相互作用としての活動という視点が欠落していたことを指摘している。観光を人との相互作用から成り立つ活動として捉えるとともに、その相互作用の結果を明らかにしていくことは、

観光現象の解明を目指す上で必須の課題である。

従来の観光研究で、旅先での出会いや交流に焦点を当てた研究が僅少であった背景には次のような要因が考えられる。現代の日本人の観光旅行は癒しや休養を目的とすることが多く、メシ・フロ・ハコ(料理・温泉・宿泊施設)を重視する傾向にある。旅行期間が短期間である場合は、宿泊施設のみで観光地内行動が完結することもある。宿泊施設においてはプライベートな感覚を保持することが重視されるため、見知らぬ他者と出会い、交流する機会は皆無に等しかった。また、家族や友人を同行者とするグループ旅行が主流であり、同行者との親睦を深めたり、思い出を作ったりすることが旅行目的とされてきたということもある。つまり、他者の介在する余地がなかったために、旅の交流機能については研究テーマとしての意義が見出されなかったといえるだろう。

近年、訪日外国人旅行者の増加や、日本人の中でも一人旅の旅行者が増加している社会的背景から、より多様な宿泊施設が必要とされるようになった。その一つが、「ゲストハウス」「ホステル」「バックパッカーズ」などと呼ばれる低価格の宿泊施設(1泊2500円~3500円程度)である(以下、国内施設はゲストハウス¹⁾、海外施設はホステルとする)。このような低価格の宿泊施設が増加することは、訪日外国人旅行者を誘致する上で必要であるとともに、日本人若年層の国内観光旅行を促進する可能性も有する。ゲストハウスは、

*ゲストハウス、交流型ツーリズム、自己過程

**大阪国際大学人間科学部准教授

***関西学院大学社会学部教授

1) 旅館業法においてゲストハウスは、簡易宿所(宿泊する場所を多人数で共用する構造および設備を主とする施設)として位置づけられる。

低価格であるだけでなく、旅行者同士はもちろんのこと旅行者と地域住民との交流が生まれやすいという特色がある。ゲストハウスに関する現象を分析することは、旅の根源的な機能の1つである交流機能のあり方を検討する上で示唆に富む（石川，2014）。ゲストハウス宿泊に代表されるような見知らぬ他者（旅先で出会った旅行者や地域住民）との交流を目的とした旅行を「交流型ツーリズム」と呼びたい。本研究では、まず国内外のゲストハウスやホステルに関する研究を概観する。次に、国内各地のゲストハウスの現地踏査を踏まえ、交流型ツーリズムが旅行者個人にもたらす影響について考察する。

ゲストハウスの定義

ゲストハウス・オーナーの櫻井（2014）は、「ゲストハウスとは安価な宿泊施設の中で、街に住む感覚の長期滞在も楽しめる。基本的にアメニティの用意はなくセルフサービスであることが多い。ホテルや旅館と違って相部屋だったり、トイレやシャワーが共同だったりするが、共用のスペースがあるからこそ宿泊者同士の出会いがあり、交流が楽しめる」というようにゲストハウスを説明している。また、『ゲストハウス紹介本』の著者 dari（2014）は、ゲストハウスの特徴を、①一泊一人から泊まれる、②相部屋が存在する、③交流スペースが存在する、④トイレとシャワールームと洗面所は基本的に共有である、という4点にまとめている。また、独自の基準で抽出した国内ゲストハウス353軒を対象として質問紙調査を実施した石川（2014）は、ゲストハウスの特徴について、空き家等を改修・改築したものが相対的に多いこと、相部屋を設けていること、基本的に素泊まりでありその宿泊費も比較的低廉であることなどを報告している。これらを踏まえ、本研究ではゲストハウスを次のように定義しておく。第1に、低価格（2500円～3500円程度）で宿泊できるドミトリー（相部屋）があること。第2に、宿泊者同士の交流を目的とした共有スペースがあること。第3に、キッチン、トイレ、シャワーといった水回り設備が他の宿泊者と共用であること。これら3つの条件を満たす宿をゲストハウスとする。写真1～写真3は、1軒のゲストハウ



写真1 宿泊者の共有スペース



写真2 ドミトリーのベッド



写真3 日本各地のゲストハウスのフライヤー

スの内観を撮影したものである。

国内におけるゲストハウスの系譜には、3つの流れがある。1つは、東京の山谷や大阪の釜ヶ崎といった大都市の寄せ場の簡易宿泊所が外国人旅

行者を受け入れるようになりゲストハウスとなった流れである。2つ目は、バックパッカーとして国内外を旅した経験を持つ人々が、自分らしいライフスタイルを追求する中でゲストハウス開業に至った流れである。そして3つ目は、町おこしや地域活性化の役割を担う拠点としてゲストハウスが設立された流れである。

ゲストハウスやホステルに関する既往研究

ここで、ゲストハウスやホステルに関する研究を概観しておく。1967年当時ユース・ホステル(YH)会員数が世界第1位となった日本において、YH精神がうまく普及していないことや、ホステラーのマナー低下を危惧した中村(1968)は、5カ所のYHでホステラー258名を対象に調査を実施し、ユースホステル利用者の意識を明らかにしている。近年では、下口(2011)が金沢市内の1軒のゲストハウスの魅力について考察し、下口(2012)はドミトリー部屋、キッチン、リビング、パソコン、シャワーといった設備の観点からゲストハウスの特徴を明らかにしている。また、石川(2012)は、長野市内のゲストハウス内で開催される複数のイベントの参与観察を通して、地域社会における小規模宿泊施設の役割について考察している。他に石川(2014)は、ゲスト

ハウス・オーナーの自由記述内容についての分析から、ゲストハウスを開業した理由・動機は、社会的理由(「市場・需要」と個人的理由(「経済・生活」「観光経験」「場づくり」「まち・文化に対する愛着」「その他」)の6つの構成要素があることを明らかにしている。

地理学関連の研究では、鈴木(2011)が、東京都山谷地域における宿泊施設の変容について分析している。そして、日雇い労働者を収容するための簡易宿泊所が、バブル崩壊以降に外国人旅行者や日本人ビジネス旅行者を積極的に受け入れはじめたこと、2002年のFIFAワールドカップの開催時に多くの外国人旅行者が簡易宿泊所に滞在したこと、「居住者重視型」「ビジネス客特化型」「外国人特化型」といった宿泊施設のタイプによって展開過程が異なることなどを明らかにしている。同様に、松村(2009, 2011)では、大阪の釜ヶ崎(あいりん地区)での大阪国際ゲストハウス地域創出委員会による外国人個人旅行者誘致の過程が報告されている。そこでは、偏見にさらされた簡易宿泊所が集積する地域が外国人旅行者が集い憩う国際的なゲストハウス地域へと変貌を遂げる過程が描かれている。

海外のバックパッカー向けホステルの研究では、Hecht & Martin(2006)が、385名のホステ

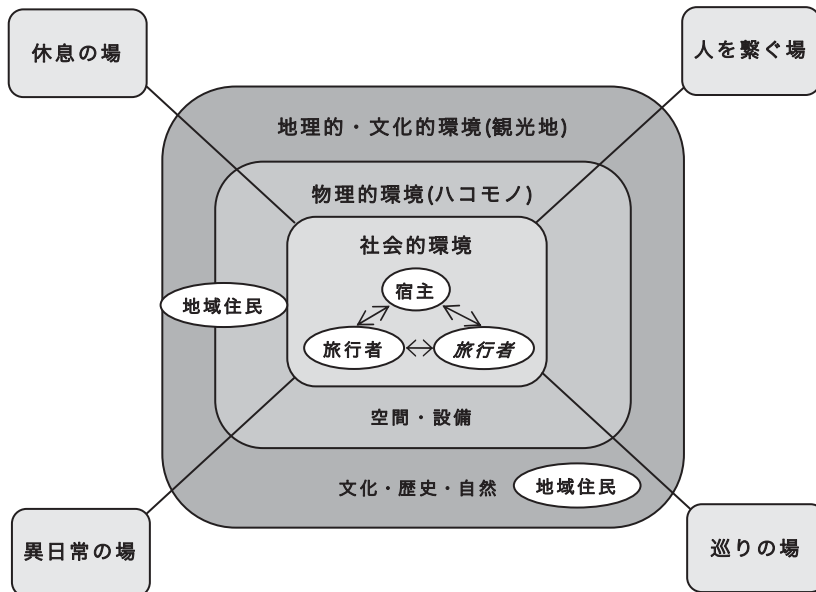


図1 ゲストハウスという場

ル利用者への調査から、バックパッカーのホステル選択で重視される内容として、①清潔さ、②所在地、③パーソナルサービス、④セキュリティ、⑤インターネットや洗濯の設備等のサービスを指摘している。

従来のゲストハウスやホテルに関する研究は、利用者の実態把握や地理学的空間構成に関するものがほとんどであり、宿泊者間の相互作用過程に着目した研究は石川（2012）を除いて見当たらない。そこで本研究では、旅行者たちが相互作用するゲストハウスという場の特性を記述することを第1の目的とする。ここでの場とは、行為の主体である個人とそれを取り囲む状況を含めた概念である（Lewin, 1951）。それを踏まえて、交流型ツーリズムの可能性について考察することを第2の目的とする。ゲストハウスという場は、文化的・歴史的な特色がある土地に引かれたオーナー（宿主）が、自らの個人史やライフスタイルを反映させて作り上げた空間でもある。そして、その土地と空間に引き寄せられた旅行者たちが集うことによって、ゲストハウスは社会的な場となる。社会的場としてのゲストハウスは、当該施設が位置する土地の特性、さらにはオーナーの個人史や趣味が反映されやすい生活空間としての特性を背景に成り立っているのである（図1）。

II. ゲストハウスという場の特性

以下では、国内各地のゲストハウス（札幌、仙台、伊勢、大阪、奈良、岡山、尾道、萩、博多、熊本、鹿児島）で実施した宿泊者としての参与観察と、オーナーおよびスタッフへの聴き取りから見出されたゲストハウスという場の特性について述べる。ゲストハウスには、「休息の場」「人を繋ぐ場」「異日常の場」「巡りの場」という4つの特性がある。

休息の場として

宿泊施設であるゲストハウスが、休息の場であることは当然であるが、一般的なホテルや旅館とは異なった休息の機能を有する。その相違点は、ホテルや旅館が、他者との接触を排除することで休息がもたらされるのに対して、ゲストハウスで

は他者が介在することによって休息がもたらされるという点である。

ゲストハウス滞在中の居心地や安らぎを高める要因は、他者との緩やかなつながりにある。具体的には、オーナーやスタッフとの関係性がゲストハウス滞在中の居心地の良さや寛ぎを高める要因の一つとなる。多くのゲストハウスでは、宿泊者が外出する際には「行ってらっしゃい」、宿に帰ってくる際には「おかえりなさい」と声を掛けているところが多かった。このような言葉を掛けられた宿泊者は、ゲストハウス内の社会的な輪に参入しやすくなる。オーナーやスタッフとの会話は、その場所の主人との繋がりを生むことから、知り合いの家に滞在しているかのような感覚にもつながる。宿泊者の居心地について、あるオーナーは次のように語っていた。

「お客さんがその場所を居心地が良いと感じるには『ここに居てもいいんだ』という認められている感覚みたいなものがあるって、はじめて生まれると思うんですよ。だから、ちょっとした目配りというか視線の向け方なんかで、それを感じてもらえるようにしているんです」

オーナーやスタッフとの関係性に加えて、宿泊者同士の緩やかなつながりもまた、ゲストハウスの居心地の良さを高める要因となる。宿泊経験のない人ならば、ゲストハウスでは、初対面の宿泊者同士が積極的に話し掛け合い、皆が賑やかに会話をしているというイメージを持つかも知れない。しかし、実際は、宿泊者同士は軽く会釈を交わしたり「こんにちは」や「Hello」と挨拶を交わしたりする程度であることが多い。各ゲストハウスの共有スペースでは、各自が読書をしたり、翌日の訪問先の情報を調べたり、お酒を飲んだり、思い思いの時間を過ごしているところが多かった。自分以外に誰も居ない空間ではなく、お互いが相手の存在を感じられる程度の適度な距離感で過ごすことがリラックスにつながることも考えられよう。これらは、宿泊者に休息をもたらす社会的要因であるが、ゲストハウスには寛ぎや安心感を高める物理的な要因もある。国内のゲストハウスは、新築の建造物も見られるが、空き家となっていた町屋や民家を改築して開業に至ったものが

多い。古い家屋特有の雰囲気や宿泊者の気持ちを落ち着かせることに作用しているのかもしれない。町屋や古民家を改築したゲストハウスの宿泊者の中には「古民家だと普段より深く眠れるような感じがする」「古い日本家屋だと時間の流れがゆったりしているように感じる」ということを話す人もいた。古い建造物に居ることによって、落ち着いた感情や安心感が得られることもゲストハウスの魅力の一つといえるだろう。

人を繋ぐ場として

一般的なホテルや旅館との最大の相違は、ゲストハウスには旅行者同士が交流する機会があるということだろう。これには、宿泊施設としてゲストハウスを選択する旅行者が交流を求めているという心理的要因も関与しているが、それ以外にもゲストハウスには人と人を繋ぐための仕組みがある。これに関しては、オーナーやスタッフが宿泊者と宿泊者、宿泊者と地域住民を繋ぐ結節点としての役割を果たすことがあること、空間や設備を共有することが宿泊者間の会話を生むきっかけとなっていることの2点があげられる。1つ目のオーナーやスタッフが結節点となることを具体的に述べると、ゲストハウスによってはオーナーやスタッフが宿泊者に参加を呼びかけて食事会を開催しているところや、簡易的な観光ツアーを実施しているところがある。また、オーナーが宿泊者と宿泊者を引き合わせ、互いの出身地や名前などを告げるなどすることで、初対面の者同士に会話のきっかけを提供する場面が複数のゲストハウスで見受けられた。あるゲストハウスオーナーは、カフェに出入りする地域住民と旅行者を結びつけることを行っていた。国内の多くのゲストハウスで人と人を積極的に繋ぎ合わせる工夫が試みられていることに関して、あるゲストハウス・オーナーは次のように語っていた。

「日本人の気質によるところが大きいでしょうねえ。海外のホステルなんかでは、初対面の旅行者同士が躊躇なく Hi! How are you? という感じで、会話を始められるのに対して、ほとんどの日本人はそんなことできないですもんね。だからこれだけ色んなゲストハウスでそれぞれ特色がある感じ

になっているのでしょう」

日本人ならば、初対面の相手に声を掛ける際、まず自分が話し掛けてもよい相手であるかを見極める段階があり、次にはそのタイミングを見計らうという段階がある。このような日本人の思慮深さが、日本のゲストハウスが海外のホステルとは異なる独自の路線で進化を遂げている要因でもある。

2つ目の空間や設備の共有が交流を促進するという点について説明する。ゲストハウスでは、ドミトリーをはじめとして、他者と何かを共有・共用することが多い。1つの部屋に複数のベッドが配置されているドミトリーでは、お互いの安心のためにも、同室の人と挨拶を交わしたりすることは常であるし、荷物の置き場などについても近くの人に対して承諾を求める機会なども多い。また、水回りの設備を共用することが会話につながることもある。このように空間や設備を他者と共有することが、初対面の宿泊者同士を繋ぎ合わせる機能を果たしている。

異日常の場として

ホテルや旅館に宿泊する観光旅行が、普段より少しオシャレをして、いつもより少し贅沢をすることで「非日常」を楽しむ旅行であるのに対して、ゲストハウスに宿泊する観光旅行は、普段着のまま低予算で、「異日常」を楽しむ旅行だといえるだろう。ゲストハウスの宿泊者が食事をする際には、ガイドブックに掲載されるような観光客向けのレストランに出掛けるというよりも、地元の人々で賑わう定食屋や飲み屋に向かうことが多い。また、スーパーマーケットやコンビニエンスストアで食材や惣菜を購入し、宿の共有キッチンで簡単に調理をするといったこともある。衣類を洗濯する際には、コインランドリーに出掛けることもあれば、近くの銭湯で一日の疲れを癒すこともある。また、ゲストハウスにはホテルや旅館で提供されるアメニティ用品もなければ、ベッドメイクも宿泊者自らの手で行うことが一般的である。つまりゲストハウスの宿泊者たちは、普段とそれほど変わらないスタイルで滞在中の生活を送ることになる。日常の感覚を持ち込んで旅をする

ことは、その地域に暮らす人々と同じ目線に立ってその土地を見つめることを可能にする。その土地の人々が日常的に利用する店や施設を利用することによって、必然的にその地域に暮らす人々と出会う機会は多くなる。そのことは、ガイドブックには掲載されていないその土地の魅力を自らで発見する試みともいえる。

巡りの場として

全国各地にゲストハウスが点在するようになったことから、ゲストハウスを泊まり歩く旅をする人や、どこのゲストハウスに泊まりたいかという基準で旅の目的地を決める人たちも存在する。いわば彼らはゲストハウスの巡礼者である。宿泊者同士で交わされる会話の中でも、各自がこれまで宿泊したゲストハウスやそのオーナーがどのような人物であるかと言ったことが話題に上ることも多い。また、ゲストハウスには、全国各地のゲストハウスのフライヤー（小さなチラシ）を陳列する場所が必ずといっていいほどある。1軒のゲストハウスに宿泊することによって、次の旅の目的地と宿泊先が決まることもある。

ゲストハウスを訪れる旅行者たちは、そのゲストハウスが立地する観光地がもつ誘引力と、ハコモノとしてのゲストハウスの空間が醸し出す雰囲気の魅力を感じてやってくる。そのため、ゲストハウスによって宿泊者の特徴や雰囲気が異なることを指摘する人もいる。ゲストハウスを巡る旅とは、比喩的に表現すると、さまざまな人々の人生を巡る旅でもある。

Ⅲ. 交流型ツーリズムの社会心理学

これまで述べてきたように、ゲストハウスには、旅行者と旅行者が交流する社会的場としての機能がある。以下では、交流型ツーリズムが旅行者個人にもたらす影響について考察する。

一期一会による自己開示

参与観察を行ったゲストハウスでは、宿泊者が一カ所に集い語り合うよりも、宿内で複数の小グループが構築されていることが多かった。初対面の宿泊者同士の会話の流れには、一定のパターン

がある。会話は、お互いの出身地や今回の旅行先や旅行目的を尋ねることから始まる。そこで両者の間が合えば、話はお互いがこれまでしてきた旅行や普段の生活に及び、時には今後の人生にまで進展することもある。その会話は自分自身に関する情報を特定の他者に対して伝達する自己開示の過程であるが、旅の解放感や一期一会の出会いということもあって、両者の開示は一気に深まることもある。自己開示には、自分自身の問題や葛藤を表出することによるカタルシスの機能（感情表出機能）、その問題に対する自分の意見や感情をより明確にする機能（自己明確化機能）、他者からのフィードバックや評価から自分の能力や意見の妥当性を判断できる機能（社会的妥当化機能）、受け手にとっては開示者から好意や信頼が得られるため二者関係の親密化につながる機能（二者関係の発展機能）などがあることが知られている（安藤、1986）。

旅行者にとって旅先は異郷であるがゆえに不安で心細いことも多い。そのような状況で、偶然出会った相手と語り合うことは、互恵的な癒しを生むのだろう。旅行者同士の語り合いでは、自分を物語ることによって、自己理解が深まるだけでなく、個々人が抱える心の揺らぎを吐露することによって、心を鎮める効果も期待できる。

先達からの旅文化の継承

旅行者同士やオーナーやスタッフとの語らいは、自分とは異なる旅のスタイルや旅行経験豊富な先達たちの旅の視点を学んだりする機会でもある。ゲストハウスで交わされる会話が、各自がこれまで行ってきた旅に及ぶことは頻繁にある。また、ゲストハウスには、自転車やバイクでの長期旅行者が逗留することもあり、彼らがこれまでの旅物語を他者に話している場面も見受けられた。ゲストハウスでは、オーナーやスタッフをはじめとする経験豊富な先達が語り部となり、旅をはじめたばかりの人たちや若年旅行者に対して、日本各地や世界各地を旅したときの経験が語られる。後輩にあたる若年旅行者たちは先達の話の聞くという経験を通して、自分とは異なる旅の視点があることに気づかされることになる。また、安宿に宿泊しながら、現地の人々が日常的に利用する交

通機関で移動し、地元の人々が好んで食べるものを食べるなど、その土地に暮らす人々と同じ目線に立って旅をすることで見えてくるものがあることを学ぶことができる。これらの会話を通して、自由や自立、多様性を受容する心といった旅を繰り返す人々の間で共有される価値観や思考様式が伝えられることもある。これらの過程は、マスツーリズムとは異なる旅の文化が継承される過程ともいえる。

交流型ツーリズムにおける自己過程

藤原 (2001, 2006) は、巡礼行動を自己変容の過程あるいは自我の成長過程として捉え、自己過程の4位相 (中村, 1990) に沿って巡礼者の心理過程を説明している。「自己過程」とは、自分が自分に注目し (自己の姿への注目)、自分の特徴を自分で描くことができるようになり (自己の姿の把握)、その描いた姿についての評価 (良い-悪い、満足-不満足、誇らしい-恥ずかしい、など) を行い (自己の姿への評価)、さらに、そのような自分の姿を他人にさらけ出したり、具合の悪いところは隠したり修飾したりする (自己の姿の表出) 一連の現象的過程のことである (中村, 1990)。巡礼行動における自己変容や自我の成長は、数十日に渡って非日常的で神聖な状況に身を置き、多様な他者から援助を受けながら行動することによってもたらされる (藤原, 2006)。

非日常性や他者との相互作用の要素を含む交流型ツーリズムにおいても、複雑性を帯びた多面的な自己概念が構築されることによって、長期的には自己実現に至ることを指摘したい。図2は、旅行者同士の社会的相互作用を基点とした自己過程

を描いたものである。

普段の生活では、周囲の環境や人間関係、自らの社会的役割が固定化しているため、意識される自己の側面も固定的で限定的である。しかし、自己とは固定的なものではなく、相手との関係性や社会的役割によって変化する多様性のあるもの (河野, 2006; サトウ・渡邊, 2005) という前提にもとづけば、旅先での出会いによって、新しい自己の側面が浮かび上がることもある。普段の生活で接する人々 (家族、友人、職場の人々) は、好まずとも自分と似た境遇の人々が多いが、旅先で出会う人々は次の点でそれとは類の異なる「異質な他者」ということになる。第1に、居住地が遠方であるために普段の生活では出会う機会のない他者であり、自分とは異なる文化的背景やライフスタイルの持ち主であることが多い。第2に、特に旅行者同士という関係であれば、両者は対等な関係であり、互いがそれぞれの日常で抱える社会的地位や役割とは無関係でいられる。第3に、旅先で出会う他者とは初対面であるため、互いに先入観なく接することができる。

普段の社会的役割や関係性から離れた状況において相互作用することは、普段は意識することのない素の自分を引き出す可能性がある。これは、地位や役割、身近な他者との関係性によって「自分とはこういうものだ」「自分はこうあるべきだ」といった考えに縛られ抑制されていた自己が解放されることによって起こる。また、異質な他者との相互作用は、人々の価値観や考え方、ライフスタイルの多様性を知ることでもある。それらとの比較によって、新たな自己の一側面を見出すこともあるだろう。このように、異質な他者が新たな

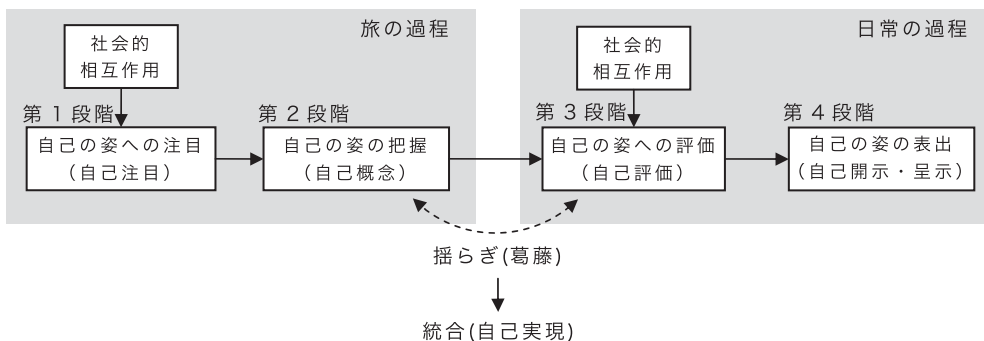


図2 交流型ツーリズムにおける自己過程

自分を映し出す鏡の役割を果たすことで、自己に関する気づきが生まれ、そこに注目ようになる(第1段階:自己の姿への注目)。環境や接する人々が異なることによって発見された「普段とは異なる自己」は、「普段通りの自己」に加えられ、自己像が描かれることになる(第2段階:自己の姿の把握)。旅の日々において多面性を増した自己は、日常生活への復帰直後は自尊心の向上に寄与することになるが、旅の過程で構築された自己の一側面は身近な他者との社会生活において、評価に値しないこともある(第3段階:自己の姿への評価)。そのような場合、旅先で見出された自己を棄却し、これまで通りの自己を表出することで(第4段階:自己の姿の表出)、日常の社会生活に適応することができるが、個人の成長にはつながらない。個人の成長とは、旅の自己と日常の自己という異なる2つの自己の間を揺らぎ葛藤しながら、両者を受容し統合することによってもたらされる。交流型ツーリズムには、自己の発見と統合という過程を繰り返すことによって、自己実現へとつながる可能性があるといえる。

ゲストハウスとは「人を開かせる場」である。一期一会のもとに自分自身を相手に開く場であるとともに、相手によって新しい自己が開かれる場でもある。そして、訪れた地域で共時的に居合わせた他者との相互作用を通して、人生の道が開かれることもあるだろう。

引用文献

- 安藤清志 (1986). 対人関係における自己開示の機能
東京女子大学紀要論集, 36(2), 167-199.
- dari (2014). ゲストハウス紹介本 FootPrints
- 藤原武弘 (2001). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (4) - 四国八十八ヶ所遍路の調査的研究 - 関西学院大学社会学部紀要, 90, 55-60.
- 藤原武弘 (2006). 巡礼 - 四国遍路を中心とした巡礼行動の経験的価値 - 小口孝司 (編) 観光の社会心理学 北大路書房 pp.137-152.
- 林幸史・藤原武弘 (2008). 訪問地域、旅行形態、年令別にみた日本人海外旅行者の観光動機 実験社会心理学研究, 48(1), 17-31.
- 林幸史・藤原武弘 (2012). 観光地での経験評価が旅行満足に与える影響 - 観光動機と旅行経験の観点から - 関西学院大学社会学部紀要, 114, 199-212.
- Hecht, JA., & Martin, D. (2006). Backpacking and hostel-picking : An analysis from Canada. *International Journal of Contemporary Hospitality Management*, 18 (1), 69-77.
- 乾弘幸 (2008). 観光行動プロセスにおける「社交」と「経験」観光に関する研究論文入選論文集, 14, 36-48.
- 石川美澄 (2012). 地域社会における小規模宿泊施設の役割に関する一考察 - 長野市善光寺門前のゲストハウスのイベントを事例として - 生活学論叢, 20, 95-102.
- 石川美澄 (2014). 国内におけるゲストハウス台頭の社会背景に関する考察 - 質問紙調査を基に - 日本国際観光学会論文集, 21, 99-104.
- 河野哲也 (2006). 〈心〉はからだの外にある - 「エコロジカルな私」の哲学 - 日本放送出版協会
- 松村嘉久 (2009). 大阪国際ゲストハウス地域を創出する試み 神田孝治 (編) 観光の空間 - 視点とアプローチ - ナカニシヤ出版 pp.264-274.
- Lewin, K. (1951). *Field thory in social science*. Harper. (猪俣佐登留 (訳) (1956). 社会科学における場の理論 誠信書房)
- 松村嘉久 (2011). 外国人旅行者が集い憩うまち釜ヶ崎へ 原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓 (編) 釜ヶ崎のスズメ 洛北出版 pp.345-375.
- 中村陽吉 (1990). 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会
- 中村樗 (1968). ユース・ホステルに関する研究 愛知工業大学研究報告, 4, 275-285.
- Rowthorn, C., Bender, A., Crawford, L., Holden, T., McLachlan, C., Milner, R., Morgan, K., Walker, B., & Yanagihara, W. (2013). *Lonely planet Japan*. Lonely Planet Publications.
- 櫻井雅之 (2014). 亀時間 - 鎌倉の宿から生まれるつながりの環 - スペースシャワーネットワーク
- 佐々木土師二 (2000). 旅行者行動の心理学 関西大学出版部
- サトウタツヤ・渡邊芳之 (2005). 「モード性格」論 - 心理学のかしこい使い方 - 紀伊國屋書店
- 下口治美 (2011). 外国人に人気の宿 - 金沢ゲストハウス「ボンギー」の魅力 - 金城紀要, 35, 119-129.
- 下口治美 (2012). 日本のゲストハウス - 宿泊スタイルの多様化 - 金城紀要, 36, 95-104.
- 鈴木富之 (2011). 東京山谷地域における宿泊施設の変容 - 外国人旅行者客およびビジネス客向け低廉宿泊施設を対象に - 地学雑誌, 120(3), 466-485.

Guesthouses as a Field where Travelers Interact with Other Travelers: Social Psychological Study of Interactive Tourism

ABSTRACT

Guesthouses are small-scale accommodations that have both common spaces for travelers and a budget dormitory. Guesthouses consist of three environments: cultural, physical, and social. Travelers have social interaction inside the guesthouses, surrounded by local sightseeing locations. In this study, the effect of the interactions among travelers was revealed by uncovering the field characteristics of the guesthouses. The results showed guesthouses included the characteristics of “resting places”, “social ties”, “unusual daily experiences”, and “pilgrimage places”. Finally, this study indicated that the self-process occurred among travelers, and suggested the possibility for them to self-actualize in the future.

Key Words: guesthouse, interactive tourism, self process